

## 詩篇138篇

## ダビデによる

## 《神への感謝》

- 1 私は心を尽くしてあなたに感謝します。天使たちの前であなたをほめ歌います。
- 2 私はあなたの聖なる宮に向かってひれ伏し、あなたの恵みとまことをあなたの御名に感謝します。  
あなたは、ご自分のすべての御名のゆえに、あなたのみことばを高く上げられたからです。
- 3 私が呼んだその日に、あなたは私に答え、私のたましいに力を与えて強くされました。

## 《感謝の拡大》

- 4 主よ。地のすべての王たちは、あなたに感謝しましょう。彼らがあなたの口のみことばを聞いたからです。
- 5 彼らは主の道について歌うでしょう。主の栄光が大きいからです。
- 6 まことに、主は高くあられるが、低い者を顧みてくださいます。しかし、高ぶる者を遠くから見抜かれます。

## 《守りの確信》

- 7 私が苦しみの中を歩いても、あなたは私を生かしてください。私の敵の怒りに向かって御手を伸ばし、あなたの右の手が私を救ってください。
- 8 主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。主よ。あなたの恵みはとこしえにあります。あなたの御手のわざを捨てないでください。

138～145 篇は一連の「ダビデ詩篇」ですが、「ダビデ」の名が冠せられた詩は百五十篇中半数以上を占めています。「ダビデ」と呼ばれてはいるもののダビデ自身の作ではないものも含まれていますが、内容的にダビデの経験に照らして読んでみると理解しやすいものが多いでしょう。

冒頭の二つの節の中に「感謝」という言葉が二回出てきますが、詩人は何について感謝をささげているのでしょうか。それは、「私が呼んだその日に、あなたは私に答え、私のたましいに力を与えて強くされ」た（3節）からです。本節をNEB（New English Bible）で読んでみると、「あなたは私を大胆で勇敢な心の者とされた」というニュアンスで訳されていることが分かります。詩人が臆病風に吹かれていたとき、しっかりと足腰を立たせてくださった神に感謝をささげているのです。

預言者エリヤは、たった一人で450人のバアルの預言者と400人のアシェラの預言者と戦い勝利しましたが（I列王18章）、王妃イゼベルの復讐の誓いの言葉を聞くや途端に恐怖に襲われ、尻尾を巻くようにして逃げ隠れてしまいました（I列王19章）。どんなに勇猛な人でも、ガタガタと震えるほど臆病になってしまうことがあるのです。

本篇の詩人もまた、何らかの命の懸かる経験によって心が縮こまってしまっていたのでしょう。しかし、彼は主の御名を呼び求めました。そして、主は直ちに応えてくださったのです。1節の「天使」ということばは「**מלאך**／エローヒーム」であるため「神（々）」とも訳せますが、意味合いとしては詩人が神殿に来て感謝の祈りをささげている様子を描いていると思われます。「**聖なる宮**」すなわち「**神殿**」があるということは、ダビデの時代ではないことが窺えます。

本篇には「**私**」が繰り返し出てくることから、基本的には個人的な感謝の祈りであると言えます。ところが、4～6節の中間部では祈りの輪が「**王たち**」に拡大され、宣教的な意図を持ち始めます。異邦の王たちが「感謝」へと導かれるのは、やはり「みことばを聞く」（4節）ことから始まるのです。主なる神様を知らなかった人々が「**主の道について歌う**」（5節）とは、何と美しい光景でしょう。そのように導かれるのは心の「**低い者**」（6節）であり、福音を受け入れやすく心の土壌が耕されているのです。その反面、「**高ぶる者**」（6節）が神を見出すことが難しいのは、彼らが救いを必要としていないからです。

詩人は敵対者への怖れに取り憑かれていましたが、神はどんな境遇からでも自分を救い出すことができになることを知りました。その経験に基づいて、これから先も守られていくことを確信しています。「**あなたは私を生かしてください**」「**あなたの右の手が私を救ってください**」（7節）と。詩人のこの確信は、最終的には彼個人に限定されるものではなく、イスラエル全体に対する救いの御業へと視野が広げられます。「**あなたの御手のわざ**」（8節）とは、イスラエルの救済史を意味します。多くの詩篇の傾向として、個人的に始められた祈りが民族的な祈りへと展開し、更には世界宣教へと拡大していくものが多いです。本篇は、世界宣教が真ん中に置かれていますが、拡がりとしては同じ形態を取っています。

私たちの祈りも、日常の小さな課題から始まり、教会全体を覚え、やがては世界中に散らされている働き人たちをとりなすものでありたい。神様が求めておられる祈りとは、そのような幅を持つものなのではないでしょうか。